

# ポローニア

## paulownia



点描画(理科):「アンスリウム(左上)」小川志穂(1年4組)、「スズメ(中央上)」今井理佐(2年4組)、「アメリカザリガニ(右上)」高羽玲理(2年3組)  
「シロイルカ(左下)」神代亜子(2年1組)、「カブトムシ(中央下)」齊藤里帆(2年5組)、「ガーベラ(右下)」織田夢丈(1年4組) (附属中学校)

## 目次

### 教育局次長挨拶

#### 巻頭言「さようなら、そしてありがとう」

◆松本末男	2
JICA課題別研修を終えて ◆氣仙有実子	2
平成29年度 教育実習を実施 ◆濱田 淳	3
「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催 ◆濱本悟志	3
2017年度 SGH全国高校生フォーラムを開催 ◆豊田謙一	4
夢に向かって一歩ずつ ◆松浦歩美	4
国立パリ聾学校相互訪問交流 ◆芳之内修	5
高校生国際ESDシンポジウム・全国SGH校生徒成果発表会を開催 ◆建元喜寿	5

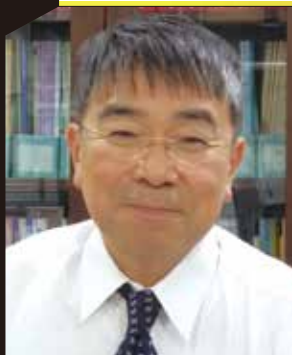
多くの感動につつまれる文化祭 ◆大野 新	6
「勝負」が子どもの可能性を引き出す ◆齋藤直人	6
学芸発表会 ～研究・学習成果の発表の場として～ ◆栖原 昂	6
10月 高等部修学旅行 in 熊本・長崎 ◆大宮弘恵	7
IMAGINE THE FUTURE. ～キャンパス体験～ ◆佐藤北斗	7
附属久里浜特別支援学校の地震津波避難訓練 ◆雷坂浩之	7
朝永振一郎記念 第12回「科学の芽」賞 表彰式・発表会開催 ◆松本末男	8





## さようなら、そしてありがとう

筑波大学 附属学校教育局 次長 松本末男

SUEO  
MATSUMOTO

今年は、東京に雪が降り積もり寒い、厳しい季節が続いた。日本海側の大雪も何度も話題になった。この厳しい冬は私たちに試練を与えて、耐えなさい、我慢なさい、精進なさいと伝えてくれるような厳しさだった。しかし、そんなに寒かった季節も一步外に出ると、木々の芽が膨らんでいる。寒い冬を耐えながら着々と春の準備をしている。私たちはどうだろう。旅立つ準備は出来ているだろうか。3月は別れの季節でもある。附属学校を飛び立つ多くの幼児、児童、生徒がいる。卒業は少し寂しく、親しい友や、先生方、学舎から別れなければならない。卒業式には別れの涙を流し寂しい気持ちになる。少しすると、その涙は乾き、やがて待っている新しい環境のことで頭がいっぱいになる。どんな友達と会うだろうか、どんな学びだろうか、また、どんな仕事になるのかとすぐそこに待つ未来に向かって心が弾む。皆さんのように若いほどその気持ちは未来に向かって目が向けられる。そして新しい環境での生活に一生懸命に頑張る心も身体も変わっていくだろう。でも、ふとした時に以前の学校を思い出すかもしれない。それは歳を重ねれば重ねるほど懐かしく思うものなのだろう。附属の学校でのかえがたい友情や心を満たしてきた芳醇なるもの。あの時があって、今があると思うことがきっとあるだろう。多分黒姫や交流の時に会った仲間との懐かしさもある。そんな時に仲間と会ってほしい。同じ時、場所、時間を共有したものにしか見えないものがある。筑波大学の附属学校は、生徒一人一人が自分で考え、自分で判断して歩むことを育てていく学校です。一人一人を大事にしていく学校です。いつの日かまた会える日を！



11月20日(月)～12月15日(金)4週間に渡り、本センターではJICA 課題別研修「障がいのある子どもための授業づくり」を行いました。この研修を行うのは昨年に引き続き2回目です。研修にはアフリカ・オセアニア諸国に加え、今回はアジアからも研修員を迎えて10カ国12名の特別支援教育・インクルーシブ教育の関係者が参加しました。研修内容は、附属特別支援学校5校と茨城県守谷市立大井沢小学校の学校参観および講義や演習を行い、障害のある子どもための授業づくりについて多角的に学びました。研修員は訪問したいずれの学校においても、専門性の高い実践に感激した様子でした。また、本センターの教材・指導法データベース(英語版)を用いた演習では、それぞれ

## JICA 課題別研修を終えて

特別支援教育研究センター 氣仙有実子

の興味関心にあわせて様々な教材を閲覧し、高い関心を示していました。このデータベースに上げられている教材は、身近な材料で手軽に作成できるものが多く、障害のある子どもための教材は高価で入手できないという課題に対して、たくさんのヒントを得られた、実際に使ってみたという感想がたくさんありました。

研修員から各国の事情を聞くと、障害のある子どもための教育に関するニーズは高まっていることが伺えます。国の事情は違っても私たちの日ごろの実践が、世界各地で障害のある子どもための教育に少しでも還元されていくことを願っています。



理療科教員養成施設では、夏季休業が終了し、しばらくして教育実習が始まります。平成29年度は附属視覚特別支援学校で、10月26日から12月4日まで行われました。理療科教員を目指す施設学生（実習生）にとって最も重要な過程の1つであり、それを支える附属視覚特別支援学校鍼灸手技療法科の教員にとっても重大な職務です。

約6週という期間で、現職教員の担当授業への参観、指導案作成、授業実習、研究授業と進んでいきます。視覚特別支援教育の実際を認識し、理療（視覚障害者が携わる職業の1つで、あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうの総称）の実情に即した内容を指導できるようにしていきます。指導案作成では、生徒観を重視し、各生徒の視機能や性格等に配慮した対応を練り、学級に対する授業内容に構成していきます。さらに、最終の研究授業では生徒の学習効率を高めるための創意工夫に富んだ実験的授業が実施され

ます。これは複数の実習生による共同作業になっています。よく考え付いたな、と思わせるような教具・教材の工夫や指導法が登場してきます。この研究事業には、施設学生（1年次）も参観し1年後に備えますが、研究授業実施の状況が、現場での見学という形式のため、全盲学生には伝わりにくいという解決すべき課題があります。今年度の研究授業では、従来にない卓抜な内容とまではいきませんでしたが、昨年度の事例を基礎にしたより精緻な授業内容を構成し、努力の結実が見られました。

この後、実習生は施設学生（2年次）に戻り、もう1つの重要課題である「卒業研究」の仕上げに入ります。この研究論文は、最終発表を経て、昨年度発刊された「理療科教員養成施設紀要」、他の専門学術雑誌等に投稿されます。それを目指して各学生は磨きをかけていきます。

## 「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催

附属学校教育局 共生シンポジウム実行委員長 濱本 悟志

2017年12月10日、筑波大学附属中学校・附属高等学校を会場に、附属学校教育局と附属学校群は「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催し、本学附属学校の児童生徒や一般参加者を含む関係者約180名が集まりました。

午前の部の前半では、パラトライアスロンで2020年東京パラリンピック出場を目指す谷真海選手（サントリーホールディングス所属、旧姓：佐藤）を講師にお迎えし、『2020年への挑戦』と題して講演を行っていただきました。谷選手からいただいた「気持ちで負けない」「目標を持って夢中になることは、決して無駄にはならない」「神様は、その人が乗り越えられない試練を与えない」というメッセージは、多くの参加者の胸に深く刻まれました。

午前の部の後半では、「いろいろな人と共に生きること～共同生活体験と海外短期留学を通して～」と題して、児童生徒の進行で『黒姫高原共同生活で得たものは？』（附属学校生合同）と『トビタテ！留学JAPANのチェコ留学で得たものは？』（附属視覚特別支援学校高等部生徒）の2つのテーマで発表を行いました。

午後の部では、附属桐が丘特別支援学校が企画した『ボッチャ』、附属大塚特別支援学校がアレンジした『ドッジビー』、附属坂戸高等学校が開発した『ファーストボール』を体験しました。異なる障害や年齢の子どもたちが一緒に活動することにより、参加者はお互いの個性を尊重する機会に触れ多様性の理解を深めました。





## 2017年度 SGH全国 高校生フォーラムを開催



東京キャンパス事務部企画推進課長  
豊田 謙一

スーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業開始から今年で4年目を迎えました。これまでの各学校における取組成果の発信

と事業の一層の推進・普及を図るため、文部科学省と筑波大学は、11月25日に「SGH全国高校生フォーラム」を開催しました。会場となったパシフィコ横浜（横浜市）には、全国123のSGH指定校及び56のアソシエイトの生徒・教員、教育委員会や保護者など一般の参加者も含めて約1,000人が集結しました。

本フォーラムの目玉は、生徒が英語でポスター発表・質疑応答を行うことです。SGH指定校である附属高等学校並びに附属坂戸高等学校の代表生徒は、「歩みを止める経済成長：次の一手を考えよう！」（附属高等学校）、「外国籍高校生と日本人高校生の協働による新たな社会貢献の仕組みづくり～バングラデッシュを事例に～」（附属坂戸高等学校）をテーマに、これまでの学習に裏打ちされた成果についてすばらしいポスター発表を行いました。また、全指定校を代表する6人の生徒による英語でのディスカッションに附属高等学校の生徒1人が参加し、ステージ上で堂々とした議論を行いました。参加者からは、生徒たちのプレゼンテーション力や英語力に感嘆の声が上がっていました。

今回のフォーラムは、学校における教育成果を全国に示す好機となるとともに、生徒にとっても大変貴重な経験になったのではないのでしょうか。



## 夢に向かって 一歩ずつ

附属桐が丘特別支援学校 高等部 2年  
松浦 歩美

私は、昨年秋、駐日韓国文化院などが主催する「韓日交流作文コンテスト」に応募し、応募総数が2千を超える

なか、日本語エッセイ部門で優秀賞をいただきました。授賞式当日は、賞状と副賞を授与された後に一言求められ、私は嬉しくて泣きながらコメントしてしまいました。式後の懇親会では、たくさんの方から「あなたの作文とコメントに感動して泣いた」と声を掛けていただき、その中のお一人だった朝日新聞の記者の方とは、作文の内容のことや韓国を好きになったきっかけなどで話が弾みました。数日後、この記者の方が私のことを取り上げた記事を朝日新聞に載せてくださいました。

さらに、授賞式のご縁で韓国文化院からキムチ作りのイベントにご招待いただきました。ここには、韓国からテレビ局が取材にきていて、車いすの日本人の参加が珍しかったのか長々とインタビューを受けました。インタビューには、一応独学で覚えた韓国語で答えたので、レポーターの方が褒めてくださいました。

これらのことが自信となり、今度は「話してみよう韓国語」というスピーチコンテストに挑戦してみたところ、フォトメッセージ部門で最優秀賞をいただくことができました。韓国語を独学でしか学んだことのない私が、初挑戦でいきなり受賞できるなんて思ってもみませんでした。賞をいただき、さらに自信が深まりました。

今後は、大学に進学し、韓国語や朝鮮王朝の歴史、文化などを専門的に学びたいと思っています。韓国好きになって早8年。夢に向かって一歩ずつ着実に進んでいきたいと思っています。



副賞の韓国旅行で訪れた清州島にて



朝鮮王朝時代の暮らしが分かる民俗村





## 国立パリ聾学校相互訪問交流

附属聴覚特別支援学校 教諭 芳之内修

附属聴覚特別支援学校高等部普通科の生徒10名は、2017年12月11日～16日に相互交流の一環として、国立パリ聾学校を訪問しました。

始めに盛大な歓迎セレモニーが行われました。パリ聾の生徒30名などに対して、本校生徒が自己紹介と日本文化のプレゼンテーションを英語で行いました。生徒からは、簡単なフランス手話や指文字を用いるなど、相手に理解してもらおう、積極的にコミュニケーションをとろうという姿勢が感じられました。相手もそれに応えるように、数人が壇上に上がり、日本の手話とフランスの手話の表現を互いに教え合う場面もありました。また、体育や音楽の授業への参加、職業科（園芸科、衛生設備科、木工科、被服科）の見学、蜜蝋作りの体験など、多様な体験をすることができました。昼休みには生徒同士でコミュニケーションを深め、サッカーや記念写真撮影も楽しんでいました。さらにヴェルサイユ宮殿などの文化施設をパリ聾の生徒と一緒に見学しました。

今回の交流では、多くの時間をパリ聾の生徒と過ごしたいという生徒の要望がかなえられ、さらに、生徒同士で連絡先を交換し、帰国後もやりとりをするなど次につながる交流活動となりました。

次回、3月19日～20日にパリ聾学校生徒が本校に来訪します。引き続き両校にとってより実り多き交流活動になるよう、発展させていきたいと思っています。



## 高校生国際ESDシンポジウム・全国SGH校生徒成果発表会を開催

附属坂戸高等学校 農業科 主幹教諭  
建元 喜寿

本年度も、平成29年11月9日(木)に「第6回高校生国際ESDシンポジウム」及び「第3回全国SGH校生徒成果発表会」を筑波大学東京キャンパスで開催しました。

「高校生の、高校生による、高校生のためのシンポジウム」をモットーに、本校の国際教育活動の中核として、国際連携協定を結んでいる、インドネシア、タイ、フィリピンから高校生を招聘し実施しています。

本年度は新たなチャレンジとして、「高校生による分科会」を開催しました。「SDGsと私たちの生活」、「SDGs and our daily life (英語による分科会)」、「Post SGH—SGHの先にあるもの—SGH5年後への高校生からの提案」、「『貧困』という難問に挑戦する」、「Social Entrepreneurship and Social Innovation」の

5分科会に分かれ、全国から集ったSGH校生、海外から参加した高校生が、学校を越え国を越え、より良い世界を構築していくための真剣な議論が交わされました。

今回は企業ブースも設け、国際機関、グローバル企業、海外コンサルタント等、多くの皆様に参加していただきました。筑坂は今後とも「オープンプラットフォームスクール」として、国内外の様々な方々が集い学びあい高めあえる場を提供していきます。





## 多くの感動につつまれる文化祭

附属駒場高等学校 副校長 大野 新

附属駒場中・高等学校の文化祭は例年、生徒全員が熱心に取り組めますが、特筆すべきは高校3年生の取り組みです。高校3年生はクラスを解体し、食品・縁日・喫茶・ステージ・コント・演劇の各班に分かれます。高3のみが食品や金銭をあつかうことを許されています。それぞれが1年間かけて準備した成果の発表がわずか3日間に凝縮されます。今年度も11月3～5日に開催され、およそ1万6千人の来場者がありました。加えて、多くの来場者がとまどわないように、案内や進行の手助けをするのが文化祭実行委員会(略称文実)です。高校2年生以下の文実は、来場者の案内や誘導、ごみの後片付けまで一手に引き受けて活躍します。このように本校の文化祭は、多くの生徒の熱心な取り組みに支えられています。



## 「勝負」が子どもの可能性を引き出す

附属小学校 教諭 齋藤直人

大運動会は、学校全体が熱く燃え上がる一大行事であり、子どもの可能性を引き出し、クラスの結束を高めます。本校の特色は「勝負」を前面に出していることです。赤白は2つのクラスが組み、クラスの結束力がそのまま勝負に直結します。子どもたちは最後まで全力で勝負に挑み、教師は共に走り叫びながら全力で励まし、保護者もまた全力で応援します。緊張と興奮、喜びと悔しさが入り混じりながら、たくさんの涙と汗が流れる、日本一の運動会だと自負しています。

これは本番までに、朝、20分休み、昼休みなどを使いながら、子どもと教師が一緒になって悩み、励まし合いながら、自分の力を最大限に発揮させようと努力を積み重ねるからです。この努力の時間が本番での本気の勝負に繋がります。そして勝ち負けはあっても、その経験が子どもを大きく成長させるのです。



## 学芸発表会 ～研究・学習成果の発表の場として～

附属中学校 学芸発表会指導委員会  
栖原 昂



学芸発表会は、運動会と並ぶ本校の秋の2大行事の1つです。第55回学芸発表会は昨年(2022年)の10月28日(土)に開催され、保護者を含めた3000人近くの方にご来校いただきました。本年度のスローガン「Good Going ～自分らしく、筑波らしく～」の通り、日頃の学校生活を通して培った附属中学校生らしさを存分に発揮できた学芸発表会となりました。

本校の学芸発表会は、研究会や授業など日々の活動の成果発表に主眼が置かれています。1950年開催の第1回学芸発表会では研究会の活動発表とクラス団体による演劇が中心でしたが、現在ではそれに加えて生徒会団体や有志団体の発表も行われています。発表団体の管理や当日の運営は全て準備小委員会の生徒の手によって行われ、生徒にとって大きな成長の場ともなっています。





## 10月 高等部修学旅行 in 熊本・長崎

附属大塚特別支援学校 高等部主事

大宮弘恵



高等部2学年の修学旅行は、昨年度に続き、目的地は熊本・長崎、テーマは防災学習・平和学習・地元の方との交流です。

熊本地震で被害を受けた熊本大学教育学部附属特別支援学校に応援メッセージを送ったことをきっかけに交流が始まりました。到着してすぐ、熊大附属の教員による防災学習。被災当時の被害やその後の復興の様子について、真剣な眼差しで話を聞く様子が見られました。交流会では、高等部の1年についてスライドを使って紹介をしました。また、「くまもん体操」を教えていただき、楽しい時間を過ごしました。

長崎では、地元ガイドさんの案内で史跡名所を巡る「長崎さるく（ぶらぶら歩く）」を体験。「長崎の味研究グループ」の先生方に「ちゃんぽん」「芋よせ」の作り方を教えていただき、その日のお昼ご飯となりました。また、長崎大学教育学部で特別支援教育を専攻する学生さんに、原爆爆心地、長崎平和公園、山王神社（一本鳥居・被爆クスノキ）、浦上天主堂を案内していただき、世界中の人々が平和な世の中で暮らせるようにと祈りを捧げました。

## IMAGINE THE FUTURE.

～キャンパス体験～ 附属視覚特別支援学校 教諭 佐藤北斗

筑波大学附属視覚特別支援学校の高等部では、総合的な学習の時間において、高等部2年生を対象とした筑波大学のキャンパス体験に1日出かけます。

本年度も人間学群・障害科学類の先生方や学生さんにお世話になり、1日かけて大学生活を体験してきました。午前は大講義室でのモデル授業を生徒全員で受講し、その後はグループに分かれ、障害学生支援室や図書館内の見学、大学構内の散策、学食を食べるなどの体験ができました。午後の全体活動では、大学の授業や課外活動の話、視覚障害当事者の学生から学習支援についての話を伺うことで、生徒たちは大学生活に対して持っていたイメージをより具体化できました。

生徒たちが将来の進路を考える上で、このような体験から学ぶことは大事です。将来に向けての構想を練る一歩となりました。



学習・生活の配慮について考える



鄭教授のミニ授業を受ける様子

## 附属久里浜特別支援学校の地震津波避難訓練

附属久里浜特別支援学校 副校長 雷坂浩之

附属久里浜特別支援学校は、2車線の道路を挟んで海、海面からは12メートルの高さに立地していることから、大規模な地震が起きた場合には津波の被害が予想されます。そのため、地震津波に対する避難訓練を年に2回実施しています。

訓練は、地震発生による待機の後、津波発生の緊急放送を受け、全校の幼児児童・教職員が一斉に標

高30メートルの裏山を目指して避難を開始します。子供たちは全員防災頭巾をかぶって1キロ弱の山道を約15分かけて登ります。教員は、避難場所ですべての子供たちが落ち着いて過ごせるような絵本やおもちゃをリュックに入れて誘導します。避難場所では、クラス毎にテントを張って、その中で偏食傾向のある子供たち用に各家庭が準備した非常食を食べる練習を行います。訓練の終盤では、避難場所にお迎えに来た保護者やヘルパーさんへの子どもの引き取り訓練も行います。

万が一災害が起こった時に、避難場所ですべての子供たちが長期にわたって生活できる環境を整えるため、簡易トイレの設営方法や発電機の操作方法の練習、炊き出し訓練なども、教職員のみで長期休暇中に繰り返し行っています。



クラス毎にテントを設営

裏山を目指して避難開始



## 朝永振一郎記念 第12回 「科学の芽」賞表彰式・発表会開催

附属学校教育局 次長 松本末男

12月23日(土)、本学大学会館において、朝永振一郎記念第12回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校246校及び海外9か国10校(中国、大韓民国、タイ、ハンガリー、インド、イラン、イタリア共和国、マレーシア、ポーランド共和国)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて3,086件の応募がありました。初めて3,000件を超える応募総数です。多くの作品の中から小学生部門9件、中学生部門8件、高校生部門1件の合計18件の作品(うち団体作品3件含む。)を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者24名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々も出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ清水諭副学長、木越英夫副学長、宮本信也副学長、金保安則副学長、BENTON Caroline F.副学長、石野利和副学長、西川博昭副学長、池田潤学長補佐室長、伊藤雅英数理解析系長及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名を超える出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である松本末男附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われました。発表会では、受賞者達がスクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしたりしていました。

最後に「科学の芽」賞実行委員会委員長の宮本副学長の総評があり、その後、同会館のレストランにおいて懇談を催しました。懇談では受賞者のご家族や、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。



### ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

**ポローニア**  
paulownia

vol.41

発行日……平成30(2018)年2月28日

発行者……附属学校教育局教育長 宮本信也

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-Jimax [日本製紙]

